

佳作「盲点」

高井光

あらすじ

坂上町子(27)は夫の孝輔(28)と暮らし、在宅で装丁デザイナーの仕事をしている。面倒くさがりやで人と関わるのが嫌いで、隣人の五十嵐遥(27)にもろくに挨拶しない。

町子は、ある朝、視界に異常を感じる。チラチラと視界の端で何かが見える。それは子供の顔のようにも感じられる。幽霊の類を信じない町子は、ただの目疲れだと思っていたが、孝輔の姿が見えなくなり、病院へ行く。

医師は目に異常はなく、精神的なストレスが原因ではないかと言う。何かを知りたくないという意識が、認識の盲点を作っているのかもしれない、と。

町子は、孝輔に最近見る夢の話をした。それは小さい頃の記憶で、ずっと思い出さないようにしてきたものである。

かくれんぼの一種ドロケイという遊びをしていた時、町子とケンタという男の子は、一人の少女をとりのこして帰ってしまった。その日、少女は変質者に誘拐されたのだった。ケンタはその変質者と思われる男に金を貰っていて、町子はその金でサイダーを飲んでいた。その少女が顔となって現れるのか？

ケンタは少女の名前が思い出せず、不可解な事故にあって死んでいた。

町子と孝輔は、過去の新聞から、少女の名前を見つける。それは隣人の五十嵐遥だった。

町子は自分の認識の盲点に気付く。それは遥が娘の未来(7)を虐待しているのを見て見ぬフリをしたことだった。

町子は未来を助けるために孝輔とともに、五十嵐家へと侵入していく。殺されそうになっていた未来を助けるが、狂った遥に襲われて、追い詰められる。その時、少年が姿を現す。それは町子が視線の端にチラチラと見ていた顔の少年だった。少年の手招きに従いバルコニーに出る町子。遥は町子を襲うが、足をすべらせてバルコニーから落ちた。即死だった。

翌日、すべては終わったかのようにみえた。仕事へ行く孝輔。見送った町子の前にまた少年が姿を現した。その時、もう一つの認識の盲点に気付く、少年の正体を発見する。それは遥のもう一人の子供、翔のバラバラ死体であった。

主婦
ショップ店員
医者
(40)(22)(34)

登場人物

坂上町子	(27)	装丁デザイナー
坂上孝輔	(28)	その夫
五十嵐遥	(27)	町子の隣人
五十嵐未来	(7)	遥の娘
斉藤ケンタ	(7)	町子の友達
短髪の少女	(7)	町子の友達
近藤慎一	(42)	編集者
斉藤浩太	(24)	ケンタの弟
少年	(6)	

○ (夢) × × 公園 (夕)

蟬がうるさく鳴いている。

東京郊外あたりで遊具よりも樹木が多い公園。

死角も多い。

男の子のような短髪の少女(7)がジャングルジムの中に座っている。牢屋に閉じこめられているよう。

ドロケイという遊びの最中。周りでは警察役の2人の男の子が見張っている。

× × ×

木陰に隠れている坂上町子(7)と斉藤ケンタ(7)。

ケンタ「町子、このまま駄菓子屋いこうぜ？」

町子「え？ 助けに行かないの？」

ケンタ、千円札を出して、

ケンタ「サイダー買ってやるからさ。飲みたいって

言ってただろ？」

町子「どうしたの？ そのお金」

ケンタ「いいから行こうぜ？」

ケンタ、走り出す。

町子、迷うように少女を見る。

○ 坂上家・寝室(朝)

サイダーの開栓の音。

隣室から坂上孝輔(28)の悲鳴。

ベッドで目を覚ます坂上町子(27)。

○ 同・リビングキッチン(朝)

玄関からすぐに部屋になっていて、キッチンスペースにはカウンターと小さなテーブル、リビングスペースにはテレビやソファが置

かれていて、バルコニーもある。他に部屋が2つあり、寝室と町子の仕事部屋である。玄関脇には洗面所も。

孝輔、冷蔵庫の前、床を拭いている。スーツ姿である。

町子、寝室から入ってきた。

孝輔「おはよう、町子。起こしちゃった？ 吹いちやってさ」

孝輔、サイダーのペットボトルを見せる。キラクターのついたラベル。

町子、壁時計を見て、

町子「時間、大丈夫なの？」

孝輔「やべっ」

町子「私、拭いとくから行きなよ」

孝輔「悪い」

孝輔、バッグとコートを持って、

孝輔「行ってきます」

孝輔、玄関から出て行く。

町子、床に広がるサイダーを見る。

食器棚のガラスに、子供の顔が映る。

男にも女にも見える顔。

町子、ハッとしてガラスを見ると「その顔」

は消える。

町子、気のせいかな？ と目を強くつぶって、

頭を振る。

出し忘れのゴミ袋がある。

町子、舌打ちして、

町子「孝輔のやつ、また忘れた」

町子、カーディガンを羽織り、ゴミ袋を持って玄関から出ていく。

床のサイダーの気泡に「その顔」が映り、不気味に歪み、弾けて消える。

○ マンション・外廊下(朝)

同じ作りの部屋が並ぶマンション。

ゴミ袋を持った町子が出てくる。

隣の部屋、ドアの前に座っている少女、五十嵐未来(7)が町子をみつめる。

町子、無視してゴミを捨てにいく。

未来、うつろな目で町子を見つめる。

○ 同・ゴミ捨て場(朝)

住人達のゴミ捨て場。大きな収集箱が置かれている。

やってきた町子、収集箱を覗き込んで、ゴミ袋を入れる。

一つのゴミ袋から、子供の足が突き出している。生々しい死体のような足。

町子、目をこすって見直す。

足は人形のもので、見るからに作り物。

主婦の声「どうしたの？」

町子、びっくりとして振り返る。

ゴミ袋を持った主婦(34)が立っている。

町子「ちょっと目疲れみたいで」

主婦「お仕事？」

町子「はい、朝までパソコンしてたんで」

主婦「大変ね」

主婦、ゴミ袋を入れる。

足の出たゴミ袋は埋もれてしまう。

主婦「(小声で) ねえ、坂上さん、何か聞こえたり

しないの?」

町子「え、何かって?」

主婦「お宅、五十嵐さんのお隣でしょ?」

町子「はい」

主婦、唾を飲み込んで、

主婦「五十嵐さん、子供達にDVしてるんじゃないかって噂なのよ。お隣でしょ、何か聞こえたりしない? 変な音とか」

町子「いえ、特には」

主婦「五十嵐さん、真面目そうに見えるけど、けっこう遊んでるんですって。父親もいないんですって」

主婦、人が来るのに気付いて、

主婦「何かあったら教えてね?」

主婦、去っていく。

やってきたのは五十嵐遥⁽²⁷⁾。温和しそうである。

遥「おはようございます。寒いですね」

町子「はい」

遥「(笑顔で) 何話してたんですか?」

町子「他人の噂話です。私、そういうの興味ないんです」

町子、去っていく。

遥「?」

遥、温かい所作でゴミ袋を捨てる。

DVするような女には見えない。

○ 同・外廊下(朝)

町子、ゴミ捨てから戻ってくる。

座っていた未来はいなくなっている。

町子、自分の部屋に入る。

○ 坂上家・リビングキッチン(朝)

玄関から入ってきた町子。

冷蔵庫を開けようとして、床のサイダーを踏んでしまう。忘れていたのだ。

町子、大きな溜め息。

置かれたサイダーのラベル、キャラクターの顔が「その顔」になっていく。

町子、ハツとしてラベルを見る。

顔は元のキャラクターに戻っている。

町子、目をぎゅっとつぶる。

その顔の声「飲みたいだろ?」

性別のわからない不気味な声。

目を開けて、ラベルを見る。

やはり元のキャラクターである。

電話が鳴る。

町子、布巾で足の裏を拭いて、電話に出る。

町子「もしもし。近藤さん、さっき完成稿、送信しきましたけど。その返信? まだ直しあるんですか?……わかりました。後で確認しときます……14時ですね。はい」

町子、電話を置いて、目薬をさす。

○ 同・仕事部屋

パソコンデスクと本棚等がある。多種多様な本で内容に統一感はない。町子が装丁をデザインした本である。

町子、パソコンでメールを確認する。

受信フォルダから、「差出人…近藤」「件

名…完成稿」のメールを開く。

町子、読んで、

町子「(呟く) めんどくさいな」

メールを閉じる。

未開封のメール「件名…同窓会のお知らせ」がある。差出人は真つ白。

町子、開かず、画面を閉じる。

○ 同・リビングキッチン

壁時計が1時を差している。

○ 同・浴室

シャワーを浴びている町子。

水の音に混じって、

その声「助けて」

町子、シャワーを止めて耳を澄ます。

隣の部屋(五十嵐家)から物音がする。

何かが倒れるような。

しばらく耳を澄ましているが、何も聞こえない。

町子、シャワーを出す。

○ マンション・外廊下

町子、出てきて玄関の鍵を閉める。

五十嵐家のドアが開いて、未来が出てくる。

未来、町子を見る。

遥が出てきて、

遥「未来、どこ行くの?」

遥、未来の頭を撫でる。

遥、町子に気付いて、

遥 「(笑顔) こんにちは。お出かけですか？」

未来の頭を撫でている遥。

未来も遥に抱きついている。

町子、無愛想に頭を下げて、歩き出す。

○ カフェ・店内

町子と近藤慎一(42)が向かい合っている。テーブルにはデザインした装丁などの資料。

町子、目をぐりぐりこすって、

町子「わかりました。その感じでやりなおせばいいですね」

近藤「ムリ言って悪いね？」

町子「大丈夫です。慣れますから」

近藤「それよりさ、町子ちゃん、いいかげん携帯持つてよ？」

町子「嫌です」

近藤「連絡とりにくいよ」

町子「いつも自宅にいるから大丈夫ですよ」

近藤「目、疲れてんの？」

町子、指を放す。目が真っ赤。

町子「何か、おかしいんですよ」

近藤「ドライアイ？ 画面に向かいっぱなしだもんね」

町子、目薬をさしながら、

町子「しょぼしょぼするのは前からなんですけど、もつと、変なものが見えるんですよ」

近藤「変なもの？」

町子「視界の端で何かがチラチラすることってありますよね？ 何か動いたような気がして、見た

ら、何もないって」

近藤「時々あるかな」

町子「それが続くっていうか。チラチラが人の顔みたいな気がするんですよ」

近藤「こわっ、何それ。ホラーじゃん」

町子「いや、見えるならいつそ見えればいいじゃんって感じなんですけどね。私、全然平気なんです。ただはつきり見えないのがむしろ気持ち悪いというか」

近藤「眼科行った方がいいんじゃない？ 飛蚊症とかかもしれないし」

町子「めんどくさい」

近藤、灰皿からタバコをとって吸う。

町子「(驚いて) 近藤さん、タバコ……」

近藤「ごめん、嫌いだったつけ？」

近藤、もみ消す。

町子「いや、いいんですけど。タバコ、さつきから吸ってました？」

近藤「ああ、もう半分くらい吸ってるし」

町子「灰皿のタバコ、半分ぐらい。」

町子「そうでしたつけ……？」

町子、思い出せないと言をかしげる。

○ 洋服屋・店内(夕)

町子がハンガーにかかったセーターを選んで

いる。

店員(22)がやってきて、

店員「よかったら、ご試着もできますので」

町子、ピンクのセーターを選んで、

町子「これの白ってありませんか？」

店員「ありますよ」

店員、町子の持っていたすぐ隣から白いセーターを取る。

町子「！」

店員「どうかされました？」

町子「隣にあつたんですね。気付かなかった」

店員「着てみますか？」

町子「はい」

店員「あちらです」

店員が試着室を示す。

二つある試着室の一つのカーテンがサッと閉まる。

店員「どうぞ」

店員、試着室の方へ歩いていく。

試着室の一つは閉まったまま。

町子と店員がやってくる。

町子「すいません、そっち、誰かいますか？」

店員「え？」

店員、靴がないのを見て、足下を覗き込み、カーテンを開ける。

店員「(笑って) 使ってませんね。こちらがいいですか？」

町子「いえ」

町子、試着室に入る。

× × ×

試着室の中。鏡を見つめる町子。

町子、着替え始める。

町子がセーターを被る(顔が隠れる)

と、鏡に「その顔」が映る。

町子が顔を出すと、消える。
鏡を見て、姿勢を変えたりする町子。

店員の声「いかがですか？」

町子「ええ」

町子、着替え始める。

またセーターで顔が隠れると「その顔」が鏡に映る。

町子が顔を出す、今度は「その顔」は消えない。しかし、町子には見えていないのか、気付かない。

町子、服を整えてカーテンを開ける。

出迎える店員。

店員「お疲れ様でした」

町子「（悲鳴）」

店員の顔がのっぺらぼう。

店員「どうされました？」

店員の顔は元に戻っている。

町子「ごめんなさい……これ買います」

○ 路 地（夕）

歩いている町子。背後には誰もいない。

後ろから町子の肩を叩く手。

びっくりとして悲鳴をあげる町子。

孝輔の手である。町子の大きな驚き方に逆に

驚く孝輔。

町子「ちょっと、おどかさないでよ！」

孝輔「……ごめん。声かけたんだけど、町子が気付

かないから」

町子「うそ？ ごめん」

孝輔「買い物してたの？」

町子「打ち合わせがあつて、帰りに……」

孝輔「大丈夫？」

町子「え、何が？」

孝輔「目……真っ赤だよ」

町子「ああ。何か変なのよ」

町子の目、真っ赤。ただの充血ではなく、血が溢れているような不自然な赤。

○ 坂上家・リビングキッチン（夜）

ソファで横になっている町子。

孝輔が蒸しタオルを持ってくる。

町子「ありがとう」

孝輔「あんまり触らない方がいいんじゃない？」

町子「疲れたと思うの。いつもこれで楽になるから」

町子、タオルを目に載せる。

孝輔「俺、風呂入っちゃうね」

孝輔、洗面所へ行く。

町子「夕食は？ 冷凍のチャーハンあるから、それ

食べれば？」

孝輔の声「いや、食べてきたから」

町子「そう」

町子、じっとしている。

町子「ねえ、孝輔、五十嵐さんに会ったことある？」

孝輔の声「五十嵐さんってお隣の？」

町子「そう。どう思う？」

孝輔の声「どうって？」

町子「温和しそудだよね？」

孝輔、答えない。

町子「あの人がDVしてるとって噂あんだけど、本当かな？ って」

孝輔、返事がない。

町子、タオルをとって、起き上がる。

町子「ねえ、孝輔？」

町子、立ち上がって、洗面所へ。

○ 同・洗面所（夜）

やってきた町子の姿が鏡に映る。

町子「孝輔？」

町子、トイレのドアを開ける。

誰もいない。

浴室の方を見る。電気は消えている。

町子、浴室のドアを開ける。

○ 同・浴室（夜）

真っ暗な浴室。

入ってきた町子。

町子「孝輔？」

その顔の声「見つけて」

町子「孝輔？ 何の遊び？」

町子、浴槽の蓋を開ける。

何もない浴槽。

背後でトイレの流れる音。

振り返る町子。

浴室の明かりが点く。

立っている孝輔。

孝輔「何してんの？」

町子「（怒って）どこにいたの？」

孝輔「どこってトイレだよ。俺が入ってたのに開け

ただろ。何だったんだよ？」

町子「孝輔……トイレにいたの？」

孝輔「いたよ。見えなかったの？」

町子「嘘でしょ？」

孝輔「本当に見えなかったの？」

町子「見えなかった」

町子、目をつぶって、力なく倒れそうになる。
抱き支える孝輔。

孝輔「今日は休んで、明日病院行こう」

○ (夢) ××公園 (夕)

木陰に隠れている7歳の町子とケンタ。

ケンタ、千円札を出して、

ケンタ「サイダー買ってやるからさ。飲みたいって
言ってただろ？」

町子「どうしたの？ そのお金」

ケンタ「いいから行こうぜ？」

ケンタ、走り出す。

町子、迷うように少女を見る。

が、欲望に負けてケンタを追いかける。

○ (夢) 駄菓子屋の前 (夕)

サイダーを飲んでる町子とケンタ。

ケンタ「うまいだろ？」

町子「うん。ねえ、ケンタ君、どうして千円も持っ
てるの？」

ケンタ「さっき、知らないオジサンがくれたんだ」

町子「知らないオジサンが？」

ケンタ「誰にも言うなよ。それ飲んだんだから、お
前も同罪だからな？」

町子「どうだい？」

ケンタ「悪いことした仲間ってことだよ」

町子、サイダーを見つめる。恐ろしいもの
のように。

○ 病院・外観 (朝)

眼科のネームプレート。

○ 同・診察室 (朝)

医者(40)が町子の目を診察している。
後ろに孝輔が立っている。

医者、机に戻ってカルテを書きながら、

医者「少し充血してますけど、異常はないようです
ね」

孝輔「でも、人の姿が見えないなんてことあるん
ですか？」

医者「精神的なことが原因かもしれませんね。モノ
を見るのは眼球でも、それを認識するのは脳な
んです。その脳の方で認識していなければ見え
ないと感じる。認識の盲点みたいなものかもし
れません」

町子「認識の盲点？」

医者「仕事やご家庭で何か強いストレスを感じたり
はしてませんか？ 何かを知りたくないという
ストレスが、見えないという誤認識を起こして
るのかもしれない」

町子「その……夢を見たんです。すごく昔の」

医者「どんな夢です？」

町子「すごく悪いことをしたような……怖い気持ち
なんです」

医者「もしそのトラウマが原因なら、きちんと向き
合うことが必要かもしれません」

孝輔「向き合うって？」

医者「申し訳ないが、私は眼科で専門外なので、こ
れ以上は心療内科で相談してください。充血の
薬は出しておきますから」

町子「向き合う……」

○ 同・駐車場

止まっている車の中。運転席に孝輔、助手席
に町子。

孝輔、シートベルトを締めて、

孝輔「家まで送るよ。それから仕事行く」

町子「孝輔、今日、このまま仕事休めない？」

孝輔「ええ？」

町子「付き合っって欲しいところあるの」

○ 車 道

都心を走る車の中。運転する孝輔。

助手席の町子は、ノートパソコンを操作しな
がら、

町子「親が離婚して、こっちに来る前、郊外の方に
住んでたのよ。小学校1年まで」

孝輔「聞いたことあるよ」

町子「その頃、よくドロケイしてたの」

孝輔「ドロケイ？」

町子「警察と泥棒のグループに別れてやるかくれん
ぼ。泥棒は警察に捕まると牢屋代わりのジャン
グルジムで待ってなきゃいけないんだけど、仲
間の泥棒がタッチしてくれたら脱走できるの」
孝輔「ああ、やったことある。俺らはケイドロって
呼んでたな」

町子「ある時、私、泥棒のグループでね、捕まった女の子を助けにきたの。ケンタ君って男の子と一緒に」

孝輔「うん」

町子「その時、ケンタ君がサイダーを買ってくれたから、助けるのやめて駄菓子屋に行こうって言うてきたの。その頃、私、親に炭酸禁止されてたから、飲んでみたくて、その子を置いて、行っちゃったの。ケンタ君、千円札持ってて、そのお金どうしたの？ っって聞いたら、知らないオジサンにもらったって」

孝輔「ええ？」

町子「お前も飲んだから同罪だっって言われて、私、怖くなっちゃって、今までそのこと誰にも言わなかったんだけど……」

孝輔「それが夢の内容？」

町子「うん。でもね、続きがあってね……」

町子「決心したように唾を飲み込み、

町子「その女の子、その日、行方不明になったの」

孝輔、驚いて急ブレーキ。

信号が赤である。

孝輔「それって……」

町子「深く考えたことなかったんだけど……その子、ちよっとトロい子で、みんなにいじめられててドロケイの時もいつも最初に捕まって閉じこめられて、仲間の泥棒もわざとタッチしなかったり、帰る時間になっても、出るなって言われて置いてかれたり……」

孝輔「その日も、置いてかれたの？」

町子「知らないよ。私、サイダー飲んで、そのまま

帰っちゃったから。でも、ケンタ君に千円くれたオジサンが、その子を狙ってたんだとしたら……」

孝輔「……」

町子「見て」

町子、ノートパソコンの画面を見せる。

町子「昨日、そのケンタくんからメールが来たの。20年振りに、突然」

画面には未開封のメール。「件名…同窓会のお知らせ」、真っ白だった差出人が「斉藤ケンタ」になっている。

孝輔「内容は？」

後ろの車がクラクションを鳴らす。

信号が青になっている。

孝輔、車を発進させる。

○ ××公園(夕)

公園脇に車が止まる。

車の中。運転席に孝輔、助手席に町子。

孝輔、エンジンを切る。

町子「いま、何時？」

孝輔、腕時計を見て、

孝輔「17時、5分前」

町子、パソコン画面を見つめている。

開かれたメール。

「件名…同窓会のお知らせ」「差出人…斉藤ケンタ」。本文「○月○日(月) 17時、××公園ジャングルジム」。

町子、シートベルトを外す。

孝輔も外す。

× × ×
公園内。ジャングルジムに腰掛けている男がいる。髪が長く引きこもり風。

男、やってきた町子と孝輔に気付いて、

男「町子って人？」

町子「ケンタ君？」

男「(怪訝な顔) ケンタは俺の兄貴だけど？」

男は斉藤浩太⁽²⁴⁾であった。

町子「ケンタ君は？」

浩太「兄貴なら死んだよ。もう10年前」

町子「どうして？」

浩太「交通事故。突然、車道に飛び出したんだ。車

が見えてなかったみたいに、突然」

町子「あなたはこうしてここに？」

浩太「男の子に、ここで町子って人が待ってるって

言われたんだよ。兄貴のことで話があるって」

町子「え？」

浩太「あんた、兄貴の知り合いなの？」

町子「小さい頃、一緒にここで遊んだことあるの。

ねえ、お兄さん、何か言ってたかった？」

浩太「何かって……兄貴、小さい頃から、ちよっと

頭おかしいところあつてさ。妄想癖っていうか

小さい頃から、人を殺したことあるとか言いふ

らしたり」

町子「女の子がどうか言ってたかった？」

浩太「女の子？ そういえば、名前が思い出せないとか言ってたな。早く見つけないと殺されると

か」

町子「！」

公園のチャイムが鳴る。5時である。

町子、ふらついて孝輔にしがみつく。

浩太「ねえ、あんたら、何なの？」

孝輔「ありがとう、悪いけど失礼するよ」

孝輔、町子を支えて去る。

浩太「おい、ちょっと？」

× × ×

車の中。助手席に町子。運転席に孝輔。

町子「思い出せないの、私も」

孝輔「あの子の名前？」

町子、頷く。

町子「（パニック状態）思い出せないからケンタ君は殺されたのよ。あの子が自分を忘れて帰った恨みで。早く思い出さないと私も……」

孝輔「落ち着けって」

孝輔、町子の肩を押さえて、

孝輔「当時の新聞を調べてみよう。事件になつてれば名前だつて出てはるはずだろ」

町子、落ち着きを取り戻して、頷く。

○ 図書館・中（夕）

部屋は広いが町子と孝輔以外には人がいない。本棚の陰は暗がりになっている。

町子と孝輔、それぞれ昔の新聞の縮尺版冊子をめくっている。

孝輔「あつた。これじゃない？」

孝輔、本を町子の方に向けて指差す。

孝輔「少女、行方不明。この新聞には名前が出てないな」

町子「次の日は？」

孝輔、めくって、

孝輔「ないな」

孝輔、しばらくめくって、

孝輔「これだ。（読む）少女、10日ぶりに発見。監禁されていた。容疑者の男を逮捕」

孝輔、黙って、読み続ける。

町子「どうしたの？」

孝輔「その子、死んでなかったんだ。誘拐されて性的暴行を受けた可能性もある……容疑者は否定しているが……少女を診察した医師は……ほぼ間違いないと……」

町子「犯人は……やっぱり……？」

孝輔、頷いて、

孝輔「おそらく。公園で一人でいるところを連れ去つたって」

町子「……」

町子、思い立ったように別の新聞の同じ記事を探す。

町子「（小さな悲鳴）！」

町子、新聞を恐れるように席を離れる。

孝輔「どうした？」

町子「こっちの新聞には名前が出てる」

孝輔、町子の見た記事を確認する。

孝輔「五十嵐遙ちゃん……」

町子「（震える声で）お隣さん」

町子と孝輔が目を合わす。

○ 車 道（夜）

走っている車の中。運転席に孝輔。助手席に町子。

孝輔「何か食べる？」

町子「食欲ない」

孝輔、頷いて、

孝輔「どこか泊まる場所探そう」

町子、頷く。

町子「（自問）あの少女が隣の五十嵐遥だとすると、私が見た顔は誰なの？」

孝輔「町子の精神的なものだったんじゃないか？ 忘れていた記憶の盲点を思い出するための。誰でもない顔」

町子「（感情的に）じゃあケンタ君は？ どうして五十嵐遥のことを探してたの？ 弟さんに私のことを教えた男の子って誰？」

孝輔「わからないよ。でも町子はもう全部思い出したんだ。昔のことだつて町子が悪い訳じゃないってわかっただろ？ もうこれ以上、考えるのはやめよう？」

町子「まだ全部じゃない」

町子、黙ったまま考え込んでいる。

孝輔「あの女が隣に住んでるから、不安になるんだ。どこか遠くに引っ越そう」

町子「あそこでない」

孝輔「え？」

町子、ラブホテルの看板を指差す。

町子「はやく横になりたい」

× × ×

車がラブホテルに入っていく。

○ ラブホテル・室内（夜）

よくある作り。壁に花柄模様。

町子と孝輔が入ってくる。

町子、ベッドに腰掛ける。
孝輔、バスルームに行くとする。

町子「どこ行くの？」

孝輔「風呂のお湯溜める。大丈夫、どこにも行かないよ」

孝輔、バスルームに入っていく。

町子「ねえ、孝輔、五十嵐遙に、会ったことある？」

孝輔の声「何度か。挨拶しただけだけど」

町子「どう思う？」

孝輔、答えない。

水が流れ始める音が聞こえる。

孝輔、バスルームから出てきて、

孝輔「どうって？」

孝輔、冷蔵庫からサイダーの缶を出す。

キャラクターのラベルのものである。

町子「あの人がDVしてると噂あんだけど、本当かな？ って」

孝輔「さあ、そんな風には見えないけど……」

孝輔、サイダーの缶を開ける。

町子「けど？」

孝輔「過去にああいうことがあった人なら、何か抱えてるのかもしれない。複雑なものを。何か飲む？」

町子「水がいい」

孝輔、水のペットボトルをとって、町子に渡す。

町子、孝輔の持つサイダーの缶を見つめる。

ラベルのキャラクターの顔が動いて、

その顔「飲みたいだろ？」

町子「え？」

孝輔「飲みたいの？ これじつと見てたから」

町子「ねえ、それ止めて」

孝輔「え？」

町子「そのサイダー捨てて」

町子、孝輔の手を払う。

床にこぼれるサイダー。その気泡の一つ一つが「その顔」になる。

町子「（悲鳴）」

孝輔、町子を抱きしめる。

孝輔「大丈夫だよ。気にしすぎなんだよ。気にするから見えないだ」

町子「気のせいじゃない！」

壁紙の花柄が、すべて「その顔」になっている（孝輔の背側）。

その顔「見て見ぬフリを続けるなら、お前も同罪だからな！」

町子「孝輔には見えないの？ あれ！」

孝輔「あれって？」

孝輔、町子から体を放す。

孝輔の顔がのつばらぼうになっている。

町子「（悲鳴）」

× × ×

ベッドで目を覚ます町子。

隣で寝ている孝輔。

孝輔「大丈夫？」

町子、呼吸を整えて、

町子「ダメなんだ……引越して遠くに行っても逃げられない」

○ マンション・外廊下（夜）

五十嵐家のドアの前、孝輔と町子。

孝輔「本当に行くの？」

町子「あの顔は私が見て見ぬフリを続ける限り消えない」

孝輔「見て見ぬフリ？」

町子「最初から気付いてたの……」

町子、頷いて、目を閉じる。

× × ×

フラッシュ。昼間。町子が出てきて鍵を閉めているところ。

五十嵐家のドアが開いて、未来が出てくる。逃げるように。

未来、助けを求めるように町子を見る。

遙が出てきて、

遙「（怪しくゆっくり）未来、どこ行くの？」

遙、未来の髪を掴む。

遙、町子に気付いて、

遙「（笑顔）こんにちは。お出かけですか？」

遙、未来の髪を掴んだまま不敵に笑う。

未来は逃げようともがいている。

× × ×

町子、目を開く。

町子「最初から気付いてたの。あの女が虐待していること。でも関わりなくなかった」

町子、インターホンを押す。

反応はない。

町子、ドアを開ける。

町子「五十嵐さん？ 未来ちゃん？」

孝輔「町子、警察に連絡しよう？」

中から大きな物音。

町子「今、助けないと、取り返しがつかないことになるかもしれない。孝輔、戻って連絡してきて」

町子、入っていく。

孝輔「待てよ」

孝輔、も追いかける。

○ 五十嵐家・リビングキッチン（夜）

室内は真っ暗だが、玄関外からの光が差し込んでいる。家の造りは坂上家と同じだが、ゴミ屋敷のように食べかすやモノが辺り構わず散らかっている。

町子と孝輔、玄関から入ってくる。

町子、玄関脇にあった傘立てからビニール傘をとって、武器のように構え、土足のまま上がり込んでいく。

手前の和室（坂上家でいう寝室）の襖が少し開いていて光が漏れている。

町子、勢いよく開く。

○ 同・和室（夜）

入ってくる町子と孝輔。

子供部屋らしくオモチャや子供の服などが散らかっている。

写真アルバムが開かれた状態で落ちている。

遙と未来の写った写真。

町子「未来ちゃん？ いたら返事して？」

町子、何かに躓く。

サイダーである。キャラクターのラベルの。

孝輔「町子、奥の部屋から声がする」

町子、頷いて部屋を出て行く。

○ 同・ダイニングキッチン（夜）

和室から戻ってきた町子と孝輔。

奥の部屋（坂上家でいう仕事部屋）から未来のむせび泣く声。

孝輔、懐中電灯を見つけて、点ける。

奥の部屋へ近づいていく町子と孝輔。

町子、照明の紐を見つけて引っ張る。

明るくなる室内。

孝輔、懐中電灯を置く。

町子、奥の部屋の引き戸を勢いよく開ける。

○ 同・奥の部屋（夜）

明かりはついている。遙の部屋らしく化粧台や衣装掛けなど。

部屋の隅で泣いている未来、猿ぐつわをされ、後ろ手に縛られている。

町子「未来ちゃん」

孝輔「町子！」

孝輔、庇うように町子の前に出る。

孝輔「（痛がる呻き声）」

倒れ込む孝輔。

ダイニングキッチンの方へ行く足音、しかし遙の姿は見えない。

町子「どうしたの？」

孝輔「見えなかったのか？」

町子「え？」

孝輔「五十嵐遙が包丁で斬りかかってきた」

孝輔、腕を押さえている。服が切れ、血が流れている。

孝輔「（未来を差しして）彼女を」

町子、未来を解いてやる。

町子「大丈夫？」

未来、黙って頷く。

町子「ケガはない？」

未来、頷くだけ。

町子「お母さんにひどいことされたの？」

未来、ただ震え、肯定も否定もしない。

町子「もう大丈夫だからね」

町子、未来を抱きしめる。

孝輔「声が出ないみたいだな」

孝輔、起き上がろうとするが痛む。

町子、孝輔を支える。

孝輔「足首ひねった」

町子「孝輔、携帯は？」

孝輔「車の中」

町子「どうしよう」

孝輔「（未来に）おうちの電話ある？」

未来、頷いて、ダイニングキッチンの方を指差す。

町子「警察呼ぶ」

孝輔「待て、町子、見えないんだろ？ あいつの姿が、俺が行く」

孝輔、立ち上がろうとするが立てない。

町子「大丈夫、私が」

町子、ゆつくりとダイニングキッチンの方へ行く。

○ 同・ダイニングキッチン（夜）

町子が覗くようにして、奥の部屋から顔を出す。

部屋に遥の姿はない（あるいは町子に見えないだけか？）。

玄関の扉が開いている。

孝輔の声「町子？」

町子「大丈夫。外に出てつたみたい」

町子、キッチンカウンターのの上に固定電話を見つける。

町子、ゆっくりと電話に近づいていく。

食器棚のガラスには「その顔」が映っているが、町子は気付かない。

町子、電話に辿り着き、受話器をとる。

プーっと、電話は通じている。

町子「電話、通じてる」

町子、110と押していく。

電話がかかる。

町子「もしもし……」

繋がると同時に切れて、無音になる。

町子「もしもし？ ももしし？」

孝輔の声「どうした？」

町子、受話器のコードを手で辿ると、いつの間にか切れている……たつた今切られたのだ。

町子のすぐ真横、包丁を持った遥が立っている。が、町子には見えていない。

遥、包丁を振る。

町子の頬が切れる。

町子「（悲鳴）」

孝輔の声「町子？」

町子、辺りのモノを投げ散らかす。そのいくつかが遥に当たる。

孝輔、足を引きずって出てくる。

町子、孝輔にぶつかるようにして、一緒に、奥の部屋へ戻る。

○ 同・奥の部屋（夜）

倒れ込んで入ってくる町子と孝輔。

町子、襖を閉めてビニール傘で押さえる。

包丁の先が、襖を突き破って出る。

町子、化粧台や衣装掛けなどを襖の前に置いてバリケードを作る。

突き破った包丁が動いて、窓のような四角い穴を開ける。

開いた穴から、ぎよつと遥の顔。

孝輔「（悲鳴）」

孝輔を見て、状況を理解する町子。

町子、壁際に寄って未来を抱き寄せる。

遥、イスを使って何度も襖を叩き、バリケードを力づくで壊そうとしている。

孝輔、足を引きずりながら、町子と未来の方へ寄ってくる。

崩れていくバリケード。

その顔の声「こっち」

バルコニーの外に、「その顔」の少年(6)が立っている。

少年、手招きして、

少年「こっち、おいで」

町子は、少年↓バリケード↓孝輔、と順番に見る。

孝輔は少年に気付いていない。

町子、立ち上がった、バルコニーを開ける。

同時に、バリケードを破って遥が侵入してくる。

る。

孝輔と未来、驚き、怖がる。

遥、町子を見て、襲いかかる。

少年「こっちこっち」

町子、少年についていく。

孝輔「町子！」

遥、バルコニーへの段差に躓き、勢いでバルコニーから落下。

振り返る町子。

遥が地面に落ちた音。

町子、バルコニーから見下ろす。

×

地面に大の字で倒れている遥。

×

町子、バルコニーを見るが、少年はいない。

孝輔「大丈夫か？」

町子「（孝輔に）男の子は？」

孝輔「男の子？」

町子「見えなかった？」

孝輔「（首を振って）いや」

町子「そう……」

バルコニーのガラスに映っている少年の姿。

○ 坂上家・リビングキッチン（朝）

スーツ姿の孝輔、玄関から出かけようとしている。

寝室から町子が出てくる。頬の切り傷にガ

ーゼ。

町子「仕事行くの？」

孝輔「昨日休んじやったからね」

町子「そうだね」

孝輔、町子の頬の傷に手をあてて、

孝輔「痛む?」

町子「大丈夫。孝輔は?」

町子、孝輔の腕に手を触れる。

孝輔「大丈夫。足首はまだ痛むけど」

町子「ムリしないで」

孝輔「うん。変な夢、見なかった?」

町子「何も。よく眠れた」

孝輔「目の具合は?」

町子「平気。何ともない」

孝輔「良かった。(話しづらそうに) 五十嵐遙は即

死、未来ちゃんは施設に行くことになるって」

町子「そう。終わったんだね」

孝輔「まだだよ」

町子「え?」

孝輔「まだ何度か警察に呼ばれて事情聞かれたりするだろうし、新しい家も探さないと」

町子「そうだね」

孝輔、時計を見て、

孝輔「行かないと」

町子「うん。行つてらっしゃい」

孝輔、玄関から出て行く。

町子、冷蔵庫を開けて、水を飲む。

食器棚のガラスに、子供の姿が映る。

「その顔」の少年である。

町子、ハッとしてガラスを見る。

少年は消えず、町子を見ている。

少年「見つけて」

町子「!」

少年の姿は消える。

町子、目を強くつぶって、頭を振る。

出し忘れのゴミ袋がある。

町子、何かを思い出して目を見開く。

×

フラッシュ。収集箱のゴミ袋。子供の足が突き出している。人形ではない。

×

×

主婦「五十嵐さん、子供達にDVしてるんじゃないかって……」

リピート。

×

主婦「五十嵐さん、子供達に……」

×

町子、玄関から出て行く。

×

○ マンション・外廊下(朝)

五十嵐家には警察の現場保存のための黄色いテープが張られている。

町子、それをくぐって入っていく。

表札には「五十嵐遙 未来 翔」と書かれている。

いる。

いる。

いる。

○ 五十嵐家・ダイニングキッチン(朝)

玄関から入ってきた町子。

土足のまま和室へ入っていく。

いる。

○ 同・和室(朝)

子供部屋。

入ってきた町子。写真アルバムを拾う。

そこには遙と未来、少年——もう一人の息子

・翔が写った写真。

町子、アルバムをめくる。

サイダーを飲んでいる翔の写真。

翔の声「やっと助けにきてくれた」

町子の目の前に翔が立っている。

「狭くて苦しいの。牢屋みたいで。早くここから出して?」

町子が近づくと、翔は押し入れの方へ消えていく。

町子、押し入れを開ける。

格子模様の衣装ボックスがある。

町子、それを床に下ろす。町子は重さと匂いで中身は分かっている、顔をしかめる。

町子、ボックスの蓋を開ける。

顔を背ける町子。

そこには翔のバラバラ死体。

翔の声「ありがとう」

町子、力なく尻餅をつく。

写真アルバムには、遙と未来と翔の幸せそうな笑顔が。

（おわり）